犯罪被害者と家族の問題

○　日時　10 月 20 日（火）
○　場所　ほしらんどくだまつ サルビアホール
○　講師　中谷 加代子（山口被害者支援センター）



2006 年に長女の歩（あゆみ 当時 20 歳）さんを同級生の少年に殺害された遺族としての体験と、その後の葛藤、支援活動を通じて感じた「命の尊さ」や「被害者支援のあり方」を伝える内容

遺族が直面する苦痛・葛藤、真相が分からぬ苦しみ

- 犯人の少年が自殺したため、「なぜ殺されたのか」という問いの答えが得られず、深い絶望と自身を責める日々。
- 激しい感情の浮き沈みが続くなかでは、「しっかりしないと」「しようがない」「元気になったね」といった励ましの言葉は、かえって遺族を傷つける。「今まで通り」「普通に」「自然に」接してほしい。
- 周囲の人々の温かさに包まれたことが救いになった。

「命の教育」と加害防止への思い

- 犯人の両親の姿に感じた「加害者家族も苦しみ」。
- 犯人の少年に悩みを話せる友達がいたり、周りが異変に気付いていたり、「命の教育」がなされていれば、事件は防げたかもしれない。
- 学校や更生施設で「命」や「生きること」を共に考える活動を行っている。



生きることへのメッセージ

- 「幸せは、いつも自分の心が決めます」
- 生きている幸せ
- 「当たり前」の日常の大切さ
- 互いの命を大切にすることが犯罪や事故を減らすことにつながる。

